

平成 25 年度第 1 回 新宿区文化芸術振興会議 議事要旨

■開催日時 平成 25 年 5 月 23 日 午前 10 時から午後 0 時まで

■開催場所 新宿区役所本庁舎 3 階 302 会議室

■出席者

委 員 高階秀爾 垣内恵美子 星山晋也 今沢章信 大津司 乗松好美

大野順二 原口秀夫 大和滋

(欠席 佐藤清親 舟橋香樹) * 敬称略

事務局等 加賀美地域文化部長 橋本文化観光課長 菊地文化観光係長

小滝文化観光主査 楠原主任

杉原新宿未来創造財団事務局長 鯨井新宿未来創造財団主幹

■議事の進行

1 開会

(1) 会議開催に先立ち、事務局から区の人事異動が報告され、杉原純 新宿未来創造財団等担当部長の紹介があった。

(2) 高階会長が文化芸術振興会議の開会を宣言し、開会した。

(3) 高階会長から、前回会議の振り返りがあった。

また、本日の進行について、次第に沿って進行すること及び審議を効率的に進めるため、次第の議事(1)から(3)までを一括して審議することを確認した。

2 議事(要旨)

(1) 前回会議内容の確認について

資料 1-1 及び資料 1-2 に基づき、前回会議(12 月 18 日)の内容の確認を行い、資料のとおり承認を受けた。

(2) 文化芸術振興の重点項目に関する主な取り組みについて

資料 2 に基づき、文化芸術振興の重点項目に関する主な取り組みについて、垣内専門部会長が説明を行い、資料の詳細は事務局が説明を行った。

(3) 新宿文化センターの今後のあり方について

資料 3 から資料 6 に基づき、新宿文化センターの今後のあり方について、垣内専門部会長が説明を行い、資料の詳細は事務局が説明を行った。

3 意見交換

- 資料3で、新宿文化センターのあり方を議論する背景として、新宿文化センター開館以降にサントリーホールが建設されているが、それ以降、東京都内の音楽ホールの設置状況がガラリと変わり始めたと思う。
- サントリーホール、オーチャードホール、文京シビックホール、国立劇場、すみだトリフォニーホール等が建設され、音楽関係における都内の状況が変化してきている。
- 演劇でも専門的なホールができ始め、かなり専門性が高く、演出の方法と施設の仕様が一致するような流れになってきている。
- 新宿文化センターは1979年建設ということもあり、施設としてのポジションが少し変わってきているだろう。
- 朝日生命ホール、新宿コマ劇場等、新宿区内の施設閉館が進み、ホールの利用者ニーズという問題もあるが、そうした中で新宿区の文化をどのように考えて、発信していくかを考えなければいけないのではないかな。
- 会議室といった集会的な利用は上がっているようだが、23年度震災による休館の影響からかホール等の稼働率が落ちてきているということが気になる。
- やはり新宿文化センターをどういう目的で、文化振興のためにどのように活かしていくかというイメージをはっきりさせた方がいい。
- 3つの区民ホールとの役割分担をきちんと考えていくことも大切である。
- 目指すイメージに焦点を当てて事業を企画して、イメージを引っ張っていくような自主企画をやると、似たような企画が、新宿文化センターでああいうことをやりたい、こういうことをやりたいと集まってきて、貸し館としてもイメージや方針にあった企画を誘導していけるのではないかな。
- 新宿文化センターには核となるイメージづくりが必要で、イメージが固まることで、改修計画もそれに沿ってつくられていくのだから、何らかのイメージを固めて、選択をする時期に来ているのではないかな。
- 従来の使われ方ではなく、イメージを変えて外に発信していくことで、区民に対してはね返ってくると思うので、何か1つ具体的なイメージづくりをしていきたい。
- 資料3にあるように、事業提携、フランチャイズ等、都内の主要なオーケストラは活動拠点を設けるといのが主流になっている。拠点を設けて、地域に根差した活動することが、今後のオーケストラに大きく課せられている。
- 多くのオーケストラは既に音楽ホールと提携しており、フランチャイズ以外にも事業提携等、言葉が違っても1つ、2つ事業提携しているので、オーケストラ自体が事業提携のホールや特定のまちを増やすというのはなかなか難しいだろう。拠点を複数構えて、きめ細かな演奏会ができるかということ、なかなかできないので、手を打つなら早い方がいいと思う。
- ヴェルディ生誕200周年記念公演を行うが、プロと地元の合唱団とが一緒にやる、こうした取り組みは集客面もすごく効果的なので、区民にもきちんと発信していかなければいけない。

- ・首藤康之さんのバレエの公演では、子どもたちはステージに上がり、プロの指導を受けるといふ貴重な体験をした。こうした事業は新宿文化センターの1つの方向性であり、区民参加型にして、協働でつくっていくものがよいと思う。
- ・新宿文化センターのリハーサル室はとても立派な施設で、鏡やバレエに適したバーもある。リハーサル室はステージの地下にあり、天井が低いのでなかなかオーケストラがリハーサルできるものではないが、床にリノリウムも張れると思うので、専門性を持った、たとえばバレエのレッスン等には使えるのではないか。
- ・今、バレエ公演は五反田の「ゆうぽうと」が気があるが、「ゆうぽうと」よりは新宿文化センターの方が使い勝手がいいように思う。バレエ等での活用の方もあるのではないか。
- ・パイプオルガンのオーバーホールに4,500万円もかかり、年間のコストも400万円もかかるということだが、やはり休止状態というのは、個人的にはよくないと思う。
- ・使えない状態で放置すると楽器は劣化するので、取り返しのつかないことになるのではないか。費用がかかるだろうが、やめるのであったら撤去してしまった方がいい。
- ・継続するのであれば、応募の有無はわからないが、新宿文化センターのネーミングライツを募集して費用を捻出する等の手法もあるのではないか。
- ・パイプオルガンをこのまま休止状態にするというのは、財政状況等の事情もよくわかるが、音楽家として忍びない。
- ・ある一定の週の土曜日午前中に、美術館1階の入口で、弦楽四重奏や管楽器等、特別展と相乗効果がありそうな演奏会を開催している。
- ・開催中の「オディロン・ルドン展」のイメージに合うようなものだったら、たとえば管楽器がいい、今後開催するフィレンツェのピッティ宮近代美術館コレクションの特別展では弦楽でやってみよう等、イメージしながら取り組んでいる。
- ・ある程度少数で演奏するので、個人の技量がかかなり明らかにすることもあり、特定の時期までに特定の曲をきちんと練習することが求められるので、管弦楽団にとってもメリットがあり、こうした場の活用の意味がある。
- ・美術館での取り組みが新宿文化センターの活動に対してどのように活かしていけるかというのは、今すぐは思いつかないが、いろんな新しい発想はあり得る。
- ・パイプオルガンの種類という観点からは、日本は世界でもかなり特殊な、恵まれた地域だと思う。
- ・ヨーロッパのパイプオルガン設置業者は、特定の地域に1つの施工屋がいて、その地域には同じようなオルガンしかないようだが、日本ではもともとパイプオルガンがない国なので、世界中のいろいろなところから入ってきている。
- ・東京を中心として交通機関で2時間ぐらいの距離に、世界中のあらゆる地域の、20種類近くのパイプオルガンがあるのは、世界的に見ても非常に珍しいようだ。
- ・そういう角度からのアピールというのはあまり日本国内に対しても、世界に対しても発信されていないように思い、もっといろいろな形で新宿文化センターのパイプオルガンを発信していける術はあるのではないか。

- 単にコストだけで考えると厳しい、あるいは休業やむなしというご判断があるのはわかるがもっと違う角度から支えて、活用できるような方向を考えられないか。
- 予算規模に関して、20年で4,500万円だと1年あたり200万円弱であり、維持費が年間400万円かかるので、それが600万円だと上乗せして考えればどうか。
- 20年に1回オーバーホールしなければいけないのであれば、割り戻して年間の維持費として対応すべき案件ではないか。
- 新しい価値の創出と顧客のサービスに関する経営的視点と専門性を持った職員の養成や外部契約等も必要になってきた。
- 稼働率、利用者数、利用ジャンル等は資料から見えるが、将来の顧客や投資の部分、年齢層別のプログラム等が見えづかった。
- 利用者の視点にも配慮した本来の区民ホールとしての役割や、顧客としての区民からの意見の取り入れ方に工夫が必要であり、そうしたソフト開発が必要なのではないか。
- 年齢や、障害の有無等にかかわらず、利用者の社会参加の機会の拡充として、障害者に向けてのコンサート等が少ないという感じがする。区民ホールだけではなくて、他機関や教育機関との連携等、普及啓発に向けたアウトリーチ等も必要である。
- イメージづくりがきちんとできているならば、ターゲットをはっきりして、それに向けしっかりと発信して、区民にもきっちり理解していただくということができるので、経営的な視点を持った方の参画が必要なのではないか。
- スクールコーディネーターという立場での発言になるが、新宿文化センターのイメージが明確化してくれば、より教育現場にも活用できるし、子どもたちのためになると思う。できるだけ早くイメージを固めて、区民に発信していきたい。
- 新宿文化センターでは、音楽の練習で利用できるのはリハーサル室と展示室の2カ所だ。
- 地域センターにも多目的ホールがあるが、防音が完璧でないということで、やはり金管楽器や打楽器の利用はできない。オケの弦楽器や合唱くらいであれば問題ないということもあるが、吹奏楽系は区内では新宿文化センターしか練習場所がない。
- 会議室等にもピアノが置いてあり、合唱や弦楽器の練習はできる態勢となっているので、稼働率もある程度高いが、個人的にはやはり音楽関係の方の会議室利用が多いのではないか。
- 区の催しをお知らせしている掲示板等、新宿文化センターへ行った時の見栄えが若干寂しい面がある。
- 館の職員が2年間ぐらいで異動になってしまうので、今までその職員に頼っていた部分が、全く新しい職員になってしまい、利用者としては少し寂しい。
- パイプオルガンについては、やはり区民としてずっと新宿文化センターに関ってきて、パイプオルガンはまさに新宿文化センターの象徴だと思っている。
- 今日の資料では、利用中止も視野に入れて検討するということで少し残念な気持ち。吹奏楽団の25周年で、ぜひまたパイプオルガンを利用させてもらいたいと思うので、寂しい気持ちがある。
- 確かに、黙っているとパイプオルガンを利用される方はいない。

- 弾き手はプロを呼ぶことになるので、それに見合った曲というのなかなかないが、ランチタイムコンサート等で広く皆さんに聞かせるような機会をつくるといいのではないか。
- サントリーホールや川口総合文化センター等で演奏されているランチタイムコンサートは結構満員になる。新宿では場所柄、ランチタイムになると会社関係の人が来るのではないかと思うが、最近は東新宿駅にイーストサイドスクエアもできたので、そこに訪れる方々もターゲットにして活用できるのではないか。
- パイプオルガン専門の音楽コースが東京芸術大学や武蔵野音楽大学にあったはず。各ホールには専属オルガニストがいたりする。オルガニストは、やはり練習する場所がなくて困っているということを聞いたことがある。パイプオルガンの弾き手はたくさんいると思うので、練習に活用するのはいいのではないか。
- 将来有望な若い方の練習も兼ねて、利用率を上げるような活用方法の提起も考えられる。
- やはり新宿文化センターは音楽にある程度特化すべき。場所、設備を考えても、これは貴重な施設である。一方、演劇等については、区民ホールの3か所を極力利用して、もう少し取り組みを高めてもらいたい。
- 昨年新宿文化センターの事業実績からも、演劇の割合が少ないと思う。唯一、狂言については、毎年1月に定例的に新春名作狂言の会を実施しているが、伝統芸能としては、狂言以外はおそらく新宿文化センターではほとんどやっていない。平成24年に1回、広島県の安芸高田市から来た神楽の催しがあったが、これが唯一ではないか。
- 話がそれるが、大震災の復興の、いわゆるきずなになっているのが、それぞれの地域の民俗芸能、特に神楽ではないか。
- 東京にいと新宿の戸塚囃子ぐらいしかイメージがないと思うが、地方では、どこに行ってもいまだに必ず神楽というのがあるし、これは信仰とも結びついている。
- 東北の復興については、どこへ行っても、大変な状況の中でも、それぞれが神楽やお祭りを中心にして復興しているように思う。
- こうした神楽のようなものが日本全国にあるということを知る機会がないので、東京の、さらに言えば、新宿文化センターや区民センターで伝統芸能、特に地方の民俗芸能を上演してはどうかと考えているし、これは非常にお子さんにも喜ばれると思う。
- パイプオルガンは4～5年前に素人が触れるというので、一度だけ5分間ぐらい触ったことがあり、裏側も全部拝見したが、すばらしいと思った。
- 資料では、費用対効果の件もあったが、パイプオルガンは修理をしないで日数がたてばたつほど、その後の修復の費用が莫大なものになると言われているので、休ませるということは、パイプオルガンについてはあり得ないのではないか。
- どういう形で、もっとパイプオルガンを効率的に使うか。パイプオルガンを演奏する音大の生徒は、練習できる機会が非常に少ないので、たとえば空いている時間に、新宿文化センターでは、ほかよりも少し安く練習用に貸しているとアピールすれば、相当利用者はいるはずではないか。

- 教会のパイプオルガンは、いつ行っても使われているし、ミサに来ない方でもオルガンを聞きにくる信者の方はいらっしゃるので、愛好者というのは潜在的に相当多いと思う。新宿文化センターはこういういい立地にあります。それをもっと活用してできるのではないかな。
- ヨーロッパの教会に行くと、調整しているときでも、音が鳴っていると何となく楽しい、練習を聞いているだけでも楽しいものだ。
- 28項目にある「まちへの愛着と誇りを育てる」という項目に関連するが、学校教育と新宿文化センターの関係で、ただ音楽を聞くだけではなくて、パイプオルガンがどういうものなのかということを見学させるということも大切である。
- 自分がパイプオルガンを初めて見たときの記憶というのは随分新鮮なものがあり、そういう経験をつくってあげる場所として、取り組むことも考えられるし、それがまた新宿文化センターの宣伝になると思う。
- 「まちの記憶を継ぐとか活かす」に関して、区では地域の新しい文化財を掘り起こして、それらを認定して、説明板をつくっている。
- 歌舞伎座とか、そういうものがないのにどうして歌舞伎町という地名があるのかと聞かれることがある。これは、昔、新宿に歌舞伎座をつくろうという運動があったらしく、その名残で名前だけが残ってしまったものだ。吉祥寺というまちに、吉祥寺がないのと同じようなことだ。
- 新宿のまちを歩いていると坂が多く、そこに標柱として説明が書いてある。これは、非常にまちの記憶をつくるというのに役立っている。
- 神楽坂の【神楽】もだが、実際にそういうものはないのだけれども地名で残っていて、非常に有名な場所、そういうところに説明板が立っていると、まちを歩いている楽しみのではないかな。
- ところで、歌舞伎町には、実際に歌舞伎座をつくるという話があったのか。
- 昭和20年に、戦災からの復興のときに歌舞伎劇場を建設する動きがあって、そのためには名前をまずつくってしまった方がいいだろうということで、角筈の一部と東大久保を歌舞伎町として町名を変えたようだ。
- 今年の1月に、新宿未来創造財団の「新宿と歌舞伎」という講演会があったが、戦前の新宿に「新歌舞伎座」があったという話は知らない人が多いと思う。
- 今の新宿三丁目のあたり、一時は三越南館、その後、現在の大塚家具の大きなビルのところに、戦前、新歌舞伎座があった。1920年代にでき、経営が少し難しくなり、新宿第一劇場と改称した。松竹が経営をして、昭和20年ぐらいまでは続いたが、戦後は歌舞伎ができなくて、SSK（松竹少女歌劇団）等を上演したが、結局1960年に閉館になった。かつて、戦前に新歌舞伎座という立派な名前で、新宿に歌舞伎座があった。
- 今の片岡仁左衛門のお父さんの13代目の仁左衛門が青年歌舞伎の座頭で、本格的な歌舞伎をやっていた。これは案外知られていないので、単に歌舞伎町の地名だけではなく、新宿というまちは歌舞伎と縁があるので、ぜひそういったことも顕彰してほしい。

- 現在の区長になってから、各まちの要所にその場所の名称の由来を書いた標柱が非常に増えた。以前はほとんどなかったように思う。それによって、たとえば今の神楽坂にしても、それから浄瑠璃坂にしても、そこで何があったかということがわかる。
- 古い町名にしても、新宿区が戦後町名変更しようとしたときに、途中で反対もあった。その結果、人口200～300人のまちが残った。角筈等も残ったらよかった。
- 筆筈町とか袋町とか、また先ほどの浄瑠璃坂とか、そういうものが残ったので、今後大事に活用していったらよろしい。
- 新宿文化センターのパイプオルガンは何故大ホールに後から設置したのか。
- 一般的には、パイプオルガンは最初から設計に含まれてつくられてきていると思うが、新宿文化センターは後で設置したことにより、構造上または演出上、若干の影響があるのだろう。
- パイプオルガンを使用しないときの、ほかの演目との関係の親和性があまりよくないのではないか。たとえばコンサートホールであつたら、ホールのセンターに位置しているし、違う例としては、水戸芸術館だとホールではなくロビーに設置されており、ランチタイムコンサートのようなものを開催しやすい構造になっていると思う。
- 気になるのは後から設置されたことと、舞台脇にあることによるほかの演目に対する影響の2点。
- クラシックだけずっとやれるのだったらいいと思うが、それ以外のことをやっていったときに、舞台脇にあることの親和性とか、後からつくったことによる問題点、それとなぜそこまでして後から設置したかという歴史的な背景がもしあれば、教えてほしい。
- パイプオルガンは、附帯設備としての利用料金が1回につき2万円で、大ホール使用が前提のため、大ホールの使用料プラス2万円でご利用いただいている。
- 学生の練習活用については、練習利用割引制度がある。こちらの制度は、一定の条件があるが、プロのオルガニストや音楽大学のオルガン科の学生に活用してもらいたい。
- 学生の場合、一定の制限はあるが、施設使用料は通常に比べ20%で、施設使用料とパイプオルガン利用料も含めて1万4,160円で案内している。プロのオルガニストの練習利用でも2万8,320円となっている。
- その練習利用割引制度は、平日午前中という制限がある。その他の時間だとやはり一般のホール利用としての運用があり、効率的運用というところから考え利用率が高くない平日の午前中の時間帯を練習利用として使っていただいている。
- たとえば夜の時間帯でホールが空いているときでもだめなのか。
- たとえば利用者が大ホールを使う場合に、1週間前に利用が決まるということはあまり考えられない。学生の練習利用であれば、1週間とか1カ月前でも貸し出しが可能ではないか。
- 現在は、練習利用割引制度は平日の午前中ということで、制度上の制限をさせていただいている。
- フレキシブルに対応できるかどうかは、検討の余地がある。

- 劇場は、公立の劇場であっても利用者がいて、受益者がいて、ある程度の負担をしているので、そこにはマーケットがある。利用者がいて、需要をする方がいるわけで、その方々の負担との割合を考えていかなければならない。
- そう考えると、自治体がつくったものだからといっても、自治体が全額を出していくわけではない。
- 新宿文化センターが東京にいろいろ展開しているほかのホールとの関係や競合も含めて、どういうポジショニングをとるのか、方向性をどうするか、戦略論の問題を考える必要がある。
- 一方で、たとえばどうやって利用者の予約を獲得するのか、たとえば大ホールを練習に使いたい方にどのように使わせていくのかという、非常に戦術的な問題を考える必要がある。
- 戦術的な議論については、できる限りディレギュレーション（規制緩和）をして、ITも使って、できるだけ夜間の予約を入れやすくなるとか、直前予約をネットで簡単にできるようになるとか、いろいろな施策をとっていかなければいけない。これは、現場で働いている職員に、どういうふうに制度設計するのがよいのかを考えてもらったほうがいい。
- 一方で、特に専門部会も含めて、この会議で議論してほしいのは、戦略的な部分である。
- 資料4-1からも、やはり現実を見ると明らかに稼働率が危機的な状況であり、危機感を持った方がいいような状態だと思う。
- 本来はもう少し長いタイムスパンでデータをとるべきだと思うが、ここ数年ぐらい、50万人台の利用者で推移していたところ、最近は、40万人、資料では24年度は40万人となっている。
- 確かに景気も悪くなったし、人口が減ったとか、2011年大震災の後だったとか、いろいろあるかもしれないが、ほかの劇場はうまくいっているところもあるし、そうでないところもあるので、個別性はあるだろう。
- それから、クラシック音楽の比率が大ホールであっても3割ぐらいと、意外に高くない。小ホールでは音楽発表会、クラシックが中心なのだろうと思うが、いわゆるプロのクラシック音楽の殿堂というイメージは、若干難しいのではないか。
- 東京を代表するブランドになるつもりなのか、それとも、より地域に密着して、文化や芸術を育てていく拠点になるのかで、目指す方向性が微妙に違う。
- 方向性によって、10年、20年たつと相当違ってくるし、そうした中でやるべき事業も変わってくるのではないか。
- 両方目指すという手も、ロジカルにはあると思うのですが、戦略論的に言うとやっぱり何をやらないかを決めていき、残ったところが重要なところなので、そこに選択と集中させるというのが一般的な考え方かと思うので、残念ですが切るべき部分というのはどうしても出てきてしまう。
- 残念だけれど、ここは諦めようという部分を議論するというのも重要なことなのではないでしょうか。

- 最近の施設は物すごく設備が進んでいるので、新宿文化センターをゼロから建て直すのだったら別だが、ハード面に相当お金をかけても、たぶんほかの新しいホールにキャッチアップすることは難しいのではないか。
- 利用者が減っているので危機感を持った方がいいと発言したが、50万人規模の利用者数は全国的に見るとそんなない、利用者数としてはトップクラスだと思う。
- そういうお客さんがついているということを勘案すると、それなりにいい箱があり、お客さんがついていて、立地場所もよいという今持っている強みをうまく、どこまで効率的に使っていくのか。
- 提案として、新宿文化センターは、学生の練習の場として使っていくとか、若手のアーティストをプロムナードコンサートやランチタイムコンサートに積極的に使っていく等、育てていく劇場というのはどうだろうか。
- 新宿未来創造財団の職員も含めて、専門家を育てていくというような話も出ている。新宿文化センター周辺に関心を持つ区民との関係、その中でのコーディネーター、アートコーディネーターの育成を1つの方向性に置くと、新宿文化センターが目指す将来像が見えてくるのではないか。
- 若手を育てていく施設とするならば、トップレベルの施設設備は必要ではないだろう。
- 海外オーケストラからの話に上がるのは、まずサントリーホール、二番目にミューザ川崎であり、これ以外は、しかたなくオーチャードホール、文化会館等が挙がり、新宿文化センターは知る限りほとんど出てこない。
- 新宿区民は、経験も積んでいるし、自身でやる方も多だろうし、外国籍の区民も多いし、新たな、フレッシュな方々を育てていくようなインキュベーターになるというのも1つの方向性ではないでしょうか。
- 昔はポリショイやベルリン等が来るとか、いわゆるクラシック音楽のザ・殿堂だったかもしれないが、今は都内ではその点はそんなに強みではないと思う。
- しかし、全国的に見たときには、劇場として非常に設備もいいし、お客さんもついていて、場所もいいので、この強みをどのように活かして、新たなポジショニングをするかを考えることがイメージアップにもつながっていくと思う。
- ポジションが決まると、おのずとどんな事業をやるのか、主催事業をどこまでやるか、必要な人材はどういう人か等が決まってくるのではないか。
- 「縮退社会」とよく言われている状況下でも、劇場ができることはたくさんある。やはり、区民の、あるいは利用者の意見を反映していくことがとても重要であり、民意の反映の部分と勇気ある撤退という部分が最近は必要になってきているのではないか。
- セゾン美術館がクローズするときに、多くの人が非常に残念だと言って、マスコミにも多くの評論が出たが、誰もお金を出さなかった。別の話だが、ちょうど同時期にあるサッカーチームが財政難になったら、市民があっという間に何か市民の会を立ち上げて、かなりの金額の寄附を集めて、たしか、別のチームに吸収合併してもらい、存続したと思う。
- 住民や利用者に寄付も含め、なんかしら働きかけるという手法もある。

- パイプオルガンについて、利用休止という考えもあるようだが、これはやはりどっちつかずで、やめるならきっぱりやめる、やるならもうなりふり構わずやるという、どちらかしかない。
- やめると決断したとき、この年間400万円の維持管理経費が不要となるが、パイプオルガンのために使っていたこの予算を、たとえばバリアフリーのために活用するか、テーブルアートに集中するか、フレッシュコンサートに集中する等の代替案があれば、考える余地が出てくるのではないか。
- 一方で、継続するとなると、年間50万人近くの利用者がいるので、たとえば1人10円、1件あたり10円アップすると500万円になるので、利用者にも薄く広く負担してもらうことも検討の余地はある。
- 利用者ではなくても、自分には行かないが、パイプオルガンがあって、魅力的な劇場があることに對して少しでも寄附をしようという区民もいるだろうと考える。
- 最近はクラウドファンディングという手法もあるし、昔はすごく手間が大変だったが、今は、インターネットでもできるようになってきているので、小口の寄付も含め、一定の負担をしてくれる人の存在を少し示すのはいかがだろうか。
- 毎年600万円の寄付は結構つらいと思うが、全額でなくても200万円でも300万円でも寄付があれば、区民がこれだけやろうとしているのだから、半分ぐらい区が負担してもいいのではないかと、文化観光課としても財政当局に説明しやすくなるのではないか。
- 新宿文化センターをサポートするしくみとして、目に見える形のサポートをうまく仕込めないか。
- 今回の資料には新宿未来創造財団の組織図や収支予算等がないので判断できないが、実は箱ものハードの維持費に物すごくお金がかかっている反面、人件費は少ないのではないか。
- 仮に人件費が少ない中で物すごく苦勞して運営しているとするならば、できれば一度新宿未来創造財団の職員、現場の職員から、どういう認識で、どんな問題があって、どんなふうに対処したいとお考えになっているかをヒアリングできると、より現実的な議論ができるのではないか。
- 新宿文化センターの職員は区の職員か、それとも新宿未来創造財団固有の職員か。
- 新宿文化センターは、新宿未来創造財団に指定管理をお願いしている。新宿文化センターには23名の職員がいるが、ほかの文化・国際交流事業等もその23人でやっており、全員が館の管理運営をやっているわけではない。
- 固有の職員もいるが、契約職員あるいはアルバイトといった職員もいる。
- 専門性を持った職員として、照明や音響等、舞台の技術系の専門性を持った職員が1名いるが、音楽系の専門性とか、芸術系の専門性を持つ職員は配置されていない。
- 魅力のある公演を誘致するための仕組みの中で、アートアドバイザーやプロモーター等による企画の検討や、新宿文化センター職員の企画力・営業・宣伝の専門性を高めるということは、現在の新宿文化センターの職員だけでは難しく、専門家でなくてはとても無理だと思う。

- たとえば音楽もあり美術もあり舞台もあるなら、その専門職員を継続的に、少なくともある程度までは育てる必要があるのではないか。
- 外部との連携を通して、アドバイザーやプロモーター、アートコーディネーター等を新宿文化センターに配置することは大事である。
- イメージアップの戦略として、資料では大ホールについて、音楽の創造と発信拠点という記載があるが、むしろそれよりも、育成の視点も入れることが考えられる。
- 新しいもの、外国からの一流オーケストラ等と呼んで盛大にやるような芸術発信ではなくて、むしろ区民に密着しながら、若い人、専門家を育てるだけではなくて、音楽の理解者である聴衆を育てる拠点としての戦略をどのように考えるか。
- その内容に応じて、運営組織や職員の配置が非常に問題になってくる。
- パイプオルガンについては、休止はもったいないという意見と、休止するということは劣化させることになるので、それぐらいならばやめてしまえというかなりラジカルな意見もあった。
- 仮に、何かの形で使えるようにしたいといった場合に、費用の問題もあり、知恵の絞り方があるのではないかという意見は、この会議としても重要である。
- 今後もまた、専門部会で、あるいはこの振興会議の中でも考えていきたい。
- 新宿文化センターの職員の話ですが、財団の統合により、昔は新宿文化センター専属の職員も、今はコズミックセンターとの交流・異動があるようだ。
- これまで30年間ずっと新宿文化センターにいた職員が、ほかの施設へ出たことで、今まで主催事業をやり、企画を立てノウハウを持っていた職員がいなくなり、新人職員が担当になった場合は、逆に利用者が一から教えるということもある。
- 平成22年に生涯学習財団と文化・国際交流財団の2つを統合し、公益財団法人の認定も受けている。
- 機能統合したことで、財団自体の目的がかなり広範に広がり、逆に1つに絞っていたものが広範になり、デメリットもあったのではないかと感じている。
- 機能統合したことにより、いわゆる財団の経営的な部分を担う職員として再配置した経緯があったので、新宿文化センターの職員数は以前と比べて若干減っている。
- 機能統合の考え方により、前財団間の人事交流が初年度から必要だったので、30年にわたって新宿文化センターにいた職員がほかの施設に人事異動で移った状況もある。
- 財団固有職員には異動があり、財団全体で配置が変わってくるが、契約職員は、基本的には異動はあまりないので、一定の専門性や経験を蓄積していける体制ではあるのではないか。
- もともと専門を有している職員ではないので、提言があったアドバイザーや、専門的な指導者も必要があるのではないかと考えている。
- 固有職員は人事異動があるが契約職員は必ずしもそうではないということだが、契約職員は文字どおり3～5年で契約が切れてしまうので、継続性をどうやって保証できるかという課題もある。
- 職員の継続性に関連して、外部アドバイザーとは別に、利用者への対応をする職員がきちんと配置されている構造でなくてはならない。

- 新宿文化センターでは実際にジャズ祭り、沖縄音楽フェスティバル、新宿ユース・プラスフェスティバル等、多彩なジャンルの公演があるのは事実であり、プロと地域の人をうまく融合した企画づくりを工夫すると、お客さんが入っている実態があるので、音楽を軸にして、地域との連携やコーディネータープランカのようなものを具体的な戦術としてつくっていく必要があるのではないか。
- 育てる劇場という意見もあるが、新宿だとライブハウスがたくさんあるので、ライブハウスとの関連をどうつくるかも可能性のひとつとして考えられると思う。
- 東京都と文化会館が各地域の会館を募集して、フレッシュ名曲コンサートを開催するが、新宿文化センターは2月2日に開催する。ほかにも新宿区は国際平和都市でもあるので、たとえば終戦記念日の近辺、3月11日近辺に平和都市に向けた発信もできるのではないか。

4 次回日程等について

- (1) 次回会議は、8月頃を開催予定とし、日程や会場等については、別途事務局から連絡することとした。また、専門部会は、部会員と相談のうえ、開催することとした。
- (2) 各委員が新宿文化センターの現場視察を行うために、新宿文化センター主催公演について、新宿文化センターまたは事務局から案内することとした。

5 閉会

会長のあいさつをもって、午後0時に閉会した。